2024 年 11 月 19 日（火）資料（引用不可）

親鸞仏教センター副所長定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第 II 期・第 14 回（通算第 20 回）

第三章　「口伝の真信」の核心――悪人成仏のため（4）

安心訓のまとめ

加来　雄之

「浄土真宗のひとは悪人になりて成仏す」

第三章　原文・先人訳・加来試訳

蓮如書写本第三章（段落と番号①～⑦は加来による）	第三章先人訳（安良岡口訳）（『歎異抄全講読』99 頁）＊〔〕は補ったと思われる箇所。下線は検討したい箇所。	加来試訳
三 一 ①善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。 ②しかるを、世のひとつねにいはく、悪人なを往生す、いかにいはんや　善人をや。 ③この条、一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。 ④そのゆへは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこゝろ　かけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。 ⑤しかれども、自力のこゝろを　ひるがへして、他力をたのみたてまつれば、	第三章 一 ①善人でさえやはり、往生を果たすのだ。まして、悪人は言うまでもないのだ。 ②それなのに、世間の人は、いつも、「悪人でさえ往生する。まして、善人は言うまでもない」と言っている。 ③このことは、一応は、理由があることに近いようであるが、本願と他力との趣旨に反している。 ④その理由は、自己の力を信じて善事を実行する人は、〔仏の〕他力を〔ひたすらに〕頼りに思う心が欠けているので、阿弥陀仏の本願〔を受けとるべき性質のもの〕ではない。 ⑤そうではあるがしかし、〔その〕自力の心を根本から転換させて、〔仏の〕他力をお頼み申し上げれば、真実の浄土の往生を果た	第三章 一 ①善人でさえやはり、往生を果たすのだ。まして、悪人は言うまでもないのだ。 ②それなのに、世間の人は、いつも、「悪人でさえ往生する。まして、善人は言うまでもない」と言っている。 ③この見解は、一応は、理由があるように見えているが、本願と他力との意趣に背いているのだ。 ④その理由は、〔往生のために〕自力をたのみ善をなそうとする人は、〔仏の〕他力を〔ひたすらに〕頼りに思う心が欠けているので、阿弥陀仏の本願〔を受けとるべき性質のもの〕ではない。 ⑤そうではあるがしかし、〔その〕自力の心を根本から転換させて、〔仏の〕他力をお頼み申し上げれば、真実の〔如来の願いに〕

真実報土の往生をとぐるなり。 ⑥煩悩具足のわれらは、いづれの行にても、生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり。 ⑦よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき。	すことになるのだ。 ⑥煩悩が十分に身に備わっているわたくしたちは、どのような修行によっても、生死〔を続ける迷いの境地〕を完全に脱け出ることがあるはずがないということをふびんにお思いになって、〔救いとろうとなされる本〕願をお起こしになった、根本の御意志は、〔善人よりも、〕悪人が仏と成るためであるから、〔仏の〕他力をお頼み申し上げる悪人こそ、ほんとうに、往生〔できる〕正しい種なのである。 ⑦それゆえに、「善人さえも往生するのだ。ましてなおさら、悪人は〔必ず往生できるのだ〕」と、〔親鸞聖人は〕おっしゃいました。	報いた土への往生を果たすことになるのだ。 ⑥煩悩具足であるわたくしたちは、どのような修行によっても、生死〔を続ける迷いの境地〕を離れることがありえないことをふびんにお思いになって、〔本〕願をお起こしになった、根本の御意志は、〔煩悩具足の〕悪人が仏と成るためであるから、〔仏の〕他力をお頼み申し上げる悪人〔という自覚〕が、確かに往生〔のため〕の正しい因なのである。 ⑦だから、善人さえも往生するのだ。ましてなおさら、悪人は〔必ず往生できるのだ〕と、〔親鸞聖人は〕おっしゃいました。

I　第三章の訳についての検討

・③「そのいはれあるににたれども」の訳について。

・③「本願他力の意趣」の訳について。以前は、「本願と他力との意趣に」と本願と他力を区別する安良岡先生の考えに疑問を呈しましたが、のちに「他力をたのむこころかけたるあひだ」・「弥陀の本願にあらず」とあるので因位の本願と果位の他力を区別するのがよいと考えを変えました。

・④「自力作善の人」の訳について。講義でも指摘したように「自力作善をたのみにしながらできない人」も入れて理解したいので。

・⑤「真実報土の往生をとぐるなり」の訳について。安良岡は「真実報土の往生を果たすことになるのだ」と訳している。「真実報土」を「真実の浄土」とすると、報土という意味がはっきりしなくなる。

摂取不捨による往生には正定聚に住するという意味がある。

・⑥「煩悩具足のわれら」の訳について

「煩悩が十分に見に備わっているわたくしたち」（安良岡訳）は、何か、私たちに煩悩が多くあ

るようなニュアンスを感じる。できれば「煩悩具足のわれら」を仏によって知ろしめした人間観を「われら」として深く信ずるとして理解したい。

「「至心」は、真実ともうすなり。真実ともうすは、如来の御ちかいの真実なるを「至心」ともうすなり。**煩悩具足の衆生は、もとより真実の心なし、清浄の心なし。濁悪邪見のゆえなり。**」（『尊号真像銘文』『聖典』（第 2 版）627 頁）

・⑥「願をおこしたまう本意、悪人成仏のため」と「他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因」の訳について。

「〔救いとろうとなされる本〕願をお起こしになった、根本の御意志は、〔善人よりも、〕悪人が仏と成るためであるから、〔仏の〕他力をお頼み申し上げる悪人こそ、ほんとうに、往生〔できる〕正しい種なのである。」（安良岡訳）

「〔本〕願をお起こしになった、根本の御意志は、〔煩悩具足の〕悪人が仏と成るためであるから、〔仏の〕他力をお頼み申し上げる悪人〔という自覚〕が、確かに往生〔のための〕正しい因なのである。」（加来訳）

→『歎異抄』では、往生と成仏との関係をどのように考えているのか。なぜ「悪人」を「往生の正因」といい、「成仏の正因」といわないのか。「往生の正因」という用例は、『観経疏』に「三心を弁定して往生の正因とすべし」とあり、また『尊号真像銘文』「正因というは、浄土にうまれて、仏にかならずなるたねなり」とある。「悪人〔としての自覚〕」と「〔の自覚〕」を補足することは説明的になって、文章の深さを失わせてしまう気もする。

また「「もとも」は「尤も」同感、肯定できる気持ちをあらわす。」（安良岡）とあるので、「確かに」と訳した。

⑦「よて」は、親鸞の言葉か、唯円の言葉か。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

Ⅱ　第三章についての質問をうけて

①「善人なおもて往生をとぐ」

④⑤「自力作善の人……真実報土の往生をとぐるなり。」

Q:「往生をとぐ」の「とぐ」が、方便の願である第 20 願＝果遂［かすい］の願と関わっているというご指摘は説得的だと感じましたが、そのように読む場合、第 3 章末尾の「よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人は」という言葉のなかで「とぐ」という表現が使われなくなっていることは、どのように理解することができるでしょうか。 第 3 章冒頭の「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」は反語として問題提起的であり、末尾の「よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人は」は確信的である、というお話が先にありましたが、その問題提起的/確信的という違いが関わってくるのでしょうか。

Q:「往生をとぐ」という表現についてですが、『口伝鈔』の「体失・不体失の往生の事」の中で、体失・不体失往生のどちらにも「往生をとぐ」という表現が使われており、また、法然上人の言葉としては「往生す（る）」という表現と両方が使われていますが、『歎異抄』においては、「往生す」と「往生をとぐ」とは厳密な使い分けがされていると領解してよろしいでしょうか？

・Q:往生を遂げるの遂げるは自力作善の末に辿り着く、というニュアンスでしょうか。悪人＝正因との対比でそんな風に考えた次第です。

Q:また、「往生をとぐ」のは、「自力のこころをひるがえして他力をたのむ」という立場の転換が必要であり、その結果、方便化土の往生の自覚において、真実報土への往生を願うという方向転換がおこるということだと思われますが、このことは「自力作善の人」である善人に限ったことではなく、**「煩悩具足のわれら」という自覚をもった自力作善の人ということ**も言えるのではないでしょうか？　お考えをお聞かせください。

→自力をひるがえし真実報土の往生をとぐる「自力作善の人」と「煩悩具足のわれら」とをどのような関係として理解しますかという質問として受けとめたいと思います。第三章は、善人と悪人という二類の人を分類しようとしているのではない、そこに私たちの転入という自覚を見出そうという視点だと思います。興味深い指摘です。

「かようのさまざまの戒品をたもてる、**いみじきひとびとも、他力真実の信心をえてのちに、真実報土には往生をとぐる**なり。みずからの、おのおのの戒善、**おのおのの自力の信、自力の善にては、実報土にはうまれず**となり。」（『唯信鈔文意』『聖典』（第２版）六七七頁）

・定散自力の称名は　果遂のちかいに帰してこそ
おしえざれども自然に　真如の門に転入する
（『浄土和讃』大経意。『聖典』（第２版）頁）

・「たのむ」について
自力作善の人……「他力をたのむこころかけたるあいだ」
煩悩具足のわれら……「他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり。」

Q:「たのむ」の問題です。「頼む」も「拠り所とする」ということではないないでしょうか。「憑む」との違いは主語の問題と考えるべきではないかと思っています。すなわち「頼む」の主語は「われら」ですが、「憑む」の主語は「本願」ではないかということです。本願がわれらの心に「憑りつく」のが親鸞が「憑む」ということばで言い表そうとしているのではないかということです。お考えを聞かせていただければ幸いです。

Q:自力の「たのむ」は「頼む」で、他力の「たのむ」は「憑む」であるというのはよく聞くことですが、「憑む」を「依り処とする」と言い替えるだけでは「頼む」との違いがはっきりしないような気がします。これまたよろしくお願いします。

→確かに「頼」が、私が私以外の何かをたよるという、二元的なニュアンスであるのに対して、「憑」という字には、本願と行者が分かちがたく関係していることをあらわす文字のように思います。

「自力」の定義

「このこころをえつれば、「他力には義のなきをもって義とす」と、本師聖人のおおせごとなり。義というは、行者のおのおののはからうこころなり。このゆえに、おのおののはからうこころをもったるほどをば自力というなり。よくよくこの自力のようをこころうべしとなり。／正嘉二歳戊午六月二十八日書之　　愚禿親鸞　八十六歳」

（『尊号真像銘文』『聖典』（第 2 版）652 頁））

「自力というは、わがみをたのみ、わがこころをたのむ、わがちからをはげみ、わがさまざまの善根をたのむひとなり。」　（『一念多念文意』『聖典』（第 2 版）663 頁））

「まず、自力と申すことは、行者のおのおのの縁にしたがいて、余の仏号を称念し、余の善根を修行して、わがみをたのみ、わがはからいのこころをもって、身・口・意のみだれごころをつくろい、めでとうしなして、浄土へ往生せんとおもうを、自力と申すなり。」

（『親鸞聖人血脈文集』『聖典』（第 2 版）727 頁）

・「煩悩具足のわれら」は「悪人」ということについて。

Q:私は、今までここの「煩悩具足のわれら」は、その直前の文章から「自力のこころをひるがえした（自力作善の）ひと」だと思っていました。いかがでしょうか。

Q:「生死をはなるることあるべからざる」について、「あらざる」ではなく、「あるべからざる」とあるところに、生死を離れられないことの強調がある な～と感じます。

→「自力作善の人……真実報土の往生をとぐるなり」

「しかれば、わがみのわるければ、いかでか如来むかえたまわんとおもうべからず。凡夫はもとより**煩悩具足したる**ゆえに、**わるきもの**とおもうべし。また、わがこころよければ往生すべしとおもうべからず。自力の御はからいにては真実の報土へうまるべからざるなり。「行者のおのおのの＊728 自力の信にては、懈慢・辺地の往生、胎生・疑城の浄土までぞ、往生せらるることにてあるべき」とぞ、うけたまわりたりし。第十八の本願成就のゆえに、阿弥陀如来とならせたまいて、不可思議の利益きわまりましまさぬ御かたちを、天親菩薩は尽十方無碍光如来とあらわしたまえり。このゆえに、よき、あしき、人をきらわず、**煩悩のこころをえらばず、へだてず**して、**往生はかならずするなり**としるべしとなり。しかれば、恵心院の和尚（源信）は『往生要集』には、本願の念仏を信楽するありさまをあらわせるには、「行住座臥をえらばず、時処諸縁をきらわず」とおおせられたり。「真実の信心をえたる人は摂取のひかりにおさめとられまいらせたり」と、たしかにあらわせり。しかれば、「**無明煩悩を具して安養浄土に往生すれば、かならずすなわち無上仏果にいたる**」と、釈迦如来ときたまえり。

（『親鸞聖人血脈文集』「かさまの念仏者のうたがいとわれたること」（『聖典』（第 2 版）727−728 頁））

「いかにいわんや、真実の報土へ往生して、大涅槃のさとりをひらかんこと、仏恩よくよく御安〔＝案〕ども候うべし。これさらに、性信坊、親鸞がはからい申すにはあらず候う。ゆめゆめ。

建長七歳 乙卯 十月三日　　愚禿親鸞八十三歳書之」

（『親鸞聖人血脈文集』「かさまの念仏者のうたがいとわれたること」『聖典』（第 2 版）729 頁））

浄土真宗のひとは悪人になりて〔念仏〕成仏す

「故法然聖人は、「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」と候いし」

（『末灯鈔』『聖典』（第 2 版）739 頁）

「他力真実のむねをあかせるもろもろの正教は、本願を信じ、念仏をもうさば仏になる。そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきや」

（『歎異抄』第十二章（『聖典』（第 2 版）773 頁）

「しかるに仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごとし。われらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。」　（『歎異抄』第九章、『聖典』（第 2 版）771 頁）

この「煩悩具足したる」とか「無明煩悩を具して」という表現をどのように受けとめるのか。私たちの課題は、私たちの心を、仏によって知ろしめされた人間観「煩悩具足の凡夫」に安立することである。そこには「悪人になりて」という課題がある。

「悪人」は「煩悩具足のわれら」「悪人成仏のため」「他力をたのみたてまつる悪人」などの確かめをうけて、「よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと」と確信的に表現されてくるのではないか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

Ⅲ　『歎異抄』の垂師訓の構造につて

┌あんしん
安心┤
└あんじん　安心・起行

安心訓┬第一章　「先師口伝」の大道
　　├第二章　「先師口伝」の伝承
　　└第三章　「口伝之真信」の核心……とおおせそうらいき
起行訓┬第四章～第六章　利他
　　├第七章～第九章　自利
　　└第十章　　……とおおせそうらいき

師訓編における二つの「とおおせそうらいき」

「また、弥陀の本願を信じそうらいぬるうえには、「義なきを義とす」とこそ、大師聖人（法然）のおおせにてそうらえ。かように義のそうろうらんかぎりは、他力にはあらず、自力なりときこえてそうろう。他力ともうすは、仏智不思議にてそうろうなるときに、煩悩具足の凡夫の、無上覚のさとりをえそうろうなることをば、仏と仏とのみ御はからいなり。さらに行者のはからいにあらずそうろう。しかれば、「義なきを義とす」とそうろうなり。義ともうすことは、自力のひとのはからいをもうすなり。他力には、しかれば、「義なきを義とす」とそうろうなり。このひとびとのおおせのようは、これには、つやつやとしらぬことにてそうらえば、とかくもうすべきにあらずそうろう。」

（『御消息集（広本）』第十八通。『聖典』（第 2 版）712 頁）